２００７年８月号

シビル　メール　ニュース

Department of Civil Engineering
Nihon Univ.

これまでに配信されましたシビルメールニュースは、「日本大学理工学部土木工学科」のホームページ(http://www.civil.cst.nihon-u.ac.jp)より『ＯＢ向け情報』→『シビルメールニュース』でご覧いただけます。なお、シビルメールニュースをE-mailにて配信ご希望の方または購読を希望される方は、卒業年次・氏名・勤務先・配信メールアドレスを明記の上、mailnews@civil.cst.nihon-u.ac.jpで購読申し込みをしてください。

発行責任者　土木工学科教授・教室主任　岸井隆幸

CST 駿河台入試フォーラムが開催される

7 月 15 日（日）に日本大学理工学部の受験を希望する生徒に対する CST 駿河台入試フォーラムが開催されました。CST 入試フォーラムは、午前 11 時から学部全体のオリエンテーションが執り行われた後、それぞれ希望学科のブースにおいて、各学科の説明が行われました。土木工学科ではミニ講義、学科紹介パネル、相談コーナーと実験／体験コーナーを設けて土木工学科の内容紹介が行われました。実験／体験コーナーでは、「材料」「水理」「環境」の 3 つの分野で先生方と大学院生がそれぞれの説明を行いましたが、各コーナーでは、多くの生徒が土木の実験装置を直接手にして熱心に質問していました。ミニ講義では島崎敏一教授の「シビルエンジニアリングの取り組み」と山敷庸亮専任講師の「国際河川における流域管理と地域環境監査システム（GEMS/Water）」が行われ、多数の生徒が熱心に聴講しておりました。

ミニ講義をされる島崎先生

実験／体験コーナー

「材料」　高機能性コンクリートの紹介

「水理」　流水デザインの紹介

「環境」　枯葉に含まれるポリフェノールを用いた有毒植物プランクトンの増殖抑制実験

OB の皆様へ

シビルメールニュースでは各地で活躍されている OB の方々を紹介するコーナーを設けたいと思いますので、OB の皆様方からのニュースをお寄せください。宛先は以下の通りです。

〒101-8308　東京都千代田区神田駿河台 1-8-14 4 号館 3 階 438B　土木工学科事務室　CMN 編集委員会宛
TEL　03-3259-0687　　FAX　03-3293-3319　　E-mail　Zimushitsu@civil.cst.nihon-u.ac.jp

平成 19 年度前期授業アンケートが実施されました

日本大学理工学部では講義をより良いものにするため、受講者に対して授業アンケートを実施しました。アンケートはマークシート方式で実施され、自由記述欄として授業に対するコメントも集めました。アンケートの質問項目は以下の 20 項目で、これらの項目を 5 段階で評価し、その結果を次年度以降の講義に反映することにしております。

■質問事項

問	【授業全体について】	問	【自分自身について】
01	授業は目標とされる学力をつけるものであった。	12	真剣に学ぼうと努力した。
02	授業に興味を持った。	13	授業に関する質問を行った。
03	授業はシラバスに沿って行われた。	14	授業の難易度は適切であった。
04	授業時間に対する授業内容は適切であった。	15	予習、復習やレポート提出など授業時間外の自己学習に積極的に取り組んだ。
05	授業は全体として満足できるものあった。		
	【教員について】	16	授業への出席率は高かった。
06	授業の進め方は適切であり、分かりやすく授業を行った。		【教室の環境について】
07	黒板やプロジェクタなどの使い方は適切であった。	17	教室は授業の進め方に適していた。
08	よく準備して、熱意を持って授業を行った。	18	受講者人数は授業内容に適していた。
09	学生の反応や理解度を考慮しながら授業を行った。	19	教室の椅子、机、黒板、情報機器などは授業に適していた。
10	授業が静粛に運ぶよう配慮した。	20	教室の照明や温度は授業に適していた。
11	無断休講はなかった。		

平成 20 年度公務員試験 1 次試験結果が発表

平成 19 年度公務員試験が 4 月から 6 月にかけて各地で行われ、1 次試験の 結果が発表されました。7 月 29 日現在で土木工学科の学生は右表のように延べ101名が1次試験に合格しております。

公務員試験 1 次合格者内訳

国家Ⅰ種	1 名	防衛省Ⅱ種	2 名
国家Ⅱ種	16 名	防衛省・自衛官	1 名
特別区	23 名	川崎市	4 名
東京都	8 名	さいたま市	5 名
千葉県	5 名	船橋市	2 名
埼玉県	5 名	前橋市	2 名
茨城県	4 名	仙台市	2 名
神奈川県	2 名	平塚市	2 名
長崎県	2 名	横浜市	2 名
長野県	2 名	相模原市	1 名
山形県	1 名	新潟市	1 名
福島県	1 名	高岡市	1 名
高知県	1 名	警視庁	2 名
鳥取県	1 名	東京消防庁	2 名

計101名（重複含む）

新しい学科のロゴの誕生

土木工学科では、このたび新しい学科のロゴを作成しました。デザインコンセプトは、土木のイメージ「生活の全てへの繋がり（道路・鉄道・河川・管路)」を「nu」という文字を使って表現したものです。NU Civil は“ニューシビル（新しい土木)”と“日大土木”を掛けています。NU Civil の文字は、マークに合わせて丸みを帯びた可読性に優れた文字としたのが特徴です。この新しいロゴは、デザイン分野で活躍する学科 OB のデザイナーに委託したもので、早速学科紹介パンフレットや封筒などに使用しています。

NU Civil

土木工学科の新しいロゴ

森元峯夫さんがフランス共和国国家功労賞を受賞

森元峯夫さん（元日本大学講師、株式会社エスイー代表取締役社長　S33 卒）がフランス共和国国家功労賞（COMMANDEUR 勲章）をフランス大使館において 2007 年 5 月 21 日に受賞されました。

日大土木Who's who

日大土木とともに歩んだ偉人を紹介するコーナーです。
第 3 回目となる今回は砂防工学の第一人者であり、1928 年の土木工学科設置当時から兼任教授として砂防工学を担当されておられた**赤木正雄先生**です。

No. 3
氏名：赤木 正雄（あかぎ まさお）
専門分野：砂防工学
略歴：

1887年（明治20年）	3月 豊岡市に生まれる
1914年（大正3年）	東京帝国大学農学部林学科を卒業 内務省（土木局）に入省
1923年（大正12年）	休職し私費にて西欧諸国に渡り ウィーン工科大学に留学
1928年（昭和3年）	日本大学教授に就任
1935年（昭和10年）	砂防協会設立
1948年（昭和23年）	建設政務次官に就任
1971年（昭和46年）	豊岡市名誉市民
同年	文化勲章受章
1972年（昭和47年）	他界（享年85歳）

赤木先生の銅像

赤木正雄先生は内務省入省と同時に滋賀県田上山で山腹砂防工事に従事した。そして 1 年間の植栽砂防を経験して、今度は渓流の砂防を担当すべく吉野川砂防工事事務所に移った。 ここで赤木は、造ったばかりの砂防施設が災害によってことごとく被災する経験をした。これがきっかけで、流砂の多い渓流の水理は日本で未発達であり、先進国で学ぶことの願望断ち難く、内務省を休職して一人オーストリアへ旅立った。そして、1923 年（大正 12 年）5 月神戸港を出帆した。すでに渓流砂防への傾斜を高めていった赤木先生は、オーストリアに滞在し、スイス、フランス、イタリアなどのアルプス周辺諸国の砂防を見て、渓流砂防工事の必要性をさらに強く認識した。1925 年（大正 14 年）に欧州から帰国した赤木先生は内務省に復職し、全国の砂防事業を指導する責任者となった。赤木先生によりわが国の砂防は根本的に転換が図られ、従来の禿げ山や崩壊地における植栽などの山腹工事に主力をおく手法に止まらず、渓流の土砂水理学に立脚した渓流工事が行われるようになった。そして 1928 年（昭和 3 年）には日本大学教授として砂防工学の講座を開設すると共に、世界でも最大の砂防工事といわれる立山砂防工事事務所初代所長として、大変な難工事であった立山の砂防工事を国直轄の砂防事業とした。赤木先生は全国で砂防を指導する一方、この立山の水源部の調査を自ら行い、自ら設計をし、立山砂防を軌道に乗せたのである。最も難航した白岩堰堤は、現在文化庁の登録文化財として指定され、先生の偉業を後世に伝えることになったのである。ここから赤木先生の足跡が全国各地に印されることになった。わが国の代表的な砂防の現場は、必ずと言っていいほど赤木先生自らの指導が行われ、赤木砂防、赤木理念が全国津々浦々まで浸透していき、新しい、近代砂防技術が一挙に全国に広がり、発展し、開花していった。その後、先生は参議院など政界でも活躍し、さらには砂防協会を発足させるなど、砂防事業の必要性を世に問いかける活動などを通して「赤木理念」を貫かれた。兵庫県豊岡市を流れる円山川畔の銅像には「答先師」と書かれている。赤木先生は「恩師の教えの中で心に響く教えは大切にし、実践しなければならない」という信念を持ち続けていたのである。

参考文献

建設分野の偉人たち　http://www.c-museum.jacic.or.jp/c-museumn/ijin/ijin12.html

最近の教員活動状況

安田陽一教授が７月１日から７月６日までイタリア・ベニスで開催された IAHR（国際水理学会）において、「傾斜水路における潜り込み流れの特性に対する流入射流の気泡混入の影響」および「階段状水路流れにおける気泡混入流れの特性」についての論文発表を行いました。また、この会議の水工構造物の部門において座長をされました。なお、この度の国際水理学会主催の国際会議において 40 代の日本人研究者で座長を行ったのは安田教授のみでした。さらに、安田教授は IAHR の水工構造物委員会委員、メデイアライブラリーの委員会委員として、この国際会議期間中にそれらの 委員会会議に出席されました。その折、水工構造物委員長および副委員長から 2010 年を目安に水工構造物の水理に関する国際ワークショップを安田教授を実行部長として、日本大学理工学部で開催することを推奨され、現在その件について検討されている。

国際会議が開催された場所

（ベネチア映画祭で使われている建物）

島崎敏一教授が 7 月 20 日に虎ノ門パストラルで開催された建設情報標準化セミナー 2007　第二次建設情報標準化推進三箇年計画成果報告会において、電子成果高度利用検討小委員会の活動報告を行った。

金子雄一郎専任講師が 6 月 28 日に水戸市で開催された「茨城県常磐線複々線化促進期成会及び水戸線複線化促進期成同盟会」において講演を行った。講演は、「鉄道の活性化による地域再生」 と題して、全国各地における鉄道活性化の事例の紹介と　地方自治体や住民の役割について言及したものである。また今国会で成立した 「地域公共交通の活性化及び再生に関する法律」についての説明も行われ、講演後、出席者との間で意見交換が行われた。

後藤浩専任講師が７月 10 日～11 日に長崎市で開催された土木学会海洋開発シンポジウムにおいて、「我が国における養浜事業の特性」と題して論文発表を行った。

山敷庸亮専任講師が編集委員長を務める、水文・水資源学会のオンライン英文レター誌 SUISUI Hydrological Research Letters が 2007 年７月に創刊致しました。(http://www.jstage.jst.go.jp/browse/suisui/-char/ja/)本誌の目的は、学問分野から実務分野まで幅広い人々に、水文学と水資源学に関係する広範な研究の情報媒体を提供することにあります。この雑誌の最も重要な３つの特徴は、T:Trans-disciplinary（学際的な研究）O：Open access（オープンアクセス）P：Prompt Publication（迅速な査読、出版）で、頭文字を取ってTOPと呼んでいます。本編集業務は日本大学理工学部 土木工学科 山敷研究室で行なっております。山敷先生の談「まだ創刊したてのレター誌ですが、皆様と共に歩んでこの雑誌の歴史を築きあげて行きたいと思います。皆様からの多数の投稿、多数の閲覧をお願いいたします。」